

## 「碍」の字表記問題再考 (27) 仏教にみる障害者像

わが国最古の仏教説話集といわれる『日本霊異記』の中で、薬師寺僧・景戒は「因果応報の理<sup>ことわり</sup>」を人々に知らしめ、「勸善懲悪」を押し進めた。善きことをすれば善き事が、悪しきことをすればその報いをもたらすという因果応報を懇々と説いたのである。その具体例を上巻 35 話、中巻 42 話、下巻 39 話の計 116 話にまとめている。

「仏、法、僧を誹<sup>そし</sup>つたために口がゆがんだ話」(上巻 19、中巻 18)、「法華経を誹つた報い」(下巻 20)、「前世の行いによって、現世で牛に生まれ変わった話」(上巻 10、20、中巻 15)、「狐と犬に生まれ変わった話」(下巻 2)、「魚取りを生業にしている男がその報いをうけて、生きながらにして地獄の苦しみを受けた話」(上巻 11) など、因果応報の説話が満載である。

### 『冥報記』

景戒は『日本霊異記』の中で、特に仏、法、僧への誹りを強く戒めると共に、「前世、現世、来世」の三世因果を説き、決して現世だけの話ではないことを知らしめている。因果応報の結果がわが身にふりかかる心身の病や障害であり、それから逃れる、救われるためには自らの悪業を悔い改め、罪が滅することを願って、経典を誦読し、功德を多く積むことであると説いている。それによって自らの運命の切り替えができるとしている。この『日本霊異記』に記された説話は、中国の『冥報記』を出典としており、そこに掲載されている説話を借用して撰述したことを、著者の景戒は明らかにしている。

『冥報記』とは、中国唐の第 3 皇帝・高宗の時代に吏部尚書<sup>りぶしょうしょ</sup>(官職)であった唐臨が撰述した仏教説話集である。内容は、因果応報の理<sup>ことわり</sup>によって冥界に赴き、帰還した人の話や霊験譚<sup>れいけんたん</sup>を集めた説話で構成されている。霊験譚とは、「神仏に祈請したり、あるいは経典を受持、誦読したりすることによって得られる、人知を超えた不思議な事し、効験のことをいう」(『日本大百科全書』)。真剣に願えば、祈れば必ず神仏に通じるという考え方である。わが国では平安時代以降、この考え方をもとに霊験を願う加持祈祷が広く流布したと言われている。奈良県壺坂町にある「壺阪寺」を舞台にして、歌舞伎で演じられている『壺坂霊験記』はその一つである。死んだはずの盲人<sup>さきわいら</sup>「沢一」が神仏の御利益によって生き返り、晴眼になったという話であるが、霊験譚とは人知を超えた不思議な、神仏のご加護を意味する。この『冥報記』には、「周の武帝が鶏卵を食べた罪で地獄に墜ちた話」(巻下三)、「筆工の娘が親の銭を盗んで羊に生まれ変わった話」(巻下十三) など因果応報の理に基づく説話が数多く収録されている。

『日本霊異記』は、この『冥報記』をそのまま真似たと言っても過言ではなく、類似する話や引用した説話などが多く盛り込まれて構成されている。しかし、お手本にしたにも関わらず、説話によっては必ずしも同じ内容ではなく、修正されたものになっている。たとえば、「仏、法、僧の誹り」に関する説話は、『冥報記』には 2 話しか掲載されていないが、『日本霊異記』では 14 話となっている。「僧侶を侮辱」する説話は『冥報記』には無く、『日本霊異記』では 7 話となっており、比較して見る限り異なるものも多い。景戒は「勸善懲悪」を人々に知らしめるために、説話の修正、

変更を行い、明らかにわが国に合致した内容に撰述したと考えられるのである。仏教の教えを弘めるために、厩戸皇子は『十七条憲法』で「篤く三法を敬う」ことを徹底して説いたが、景戒は『日本霊異記』でさらに具体的に教えに反する行為が、「地獄へ墜ちる」、「畜生道に生まれ変わる」と人々に説いたのである。

### 因果説の否定

『冥報記』は因果応報を説きながら、またいっぽうでは、「輪廻転生<sup>(1)</sup>」や「因果応報説」を否定する記述が見られるのである。「序文」に次のように書かれている。

比見衆人不信因果者説見雖多同謂善惡無報 無報之説略有三種一者自然故無因果唯當任欲待事而已二者滅盡言死身滅識無所住身識都盡誰更受苦樂以無受故知無因果三者無報言見今人有修道德貧賤早死或行凶惡富貴靈長以是事故知無因果臨窆謂儒書論善惡之報甚多

### 「簡約」<sup>(2)</sup>

仏教の因果説を否定する三種の説が存在する。一は、自然説。すべて自然であって因果などというものはない。人はただ欲するままに行動すればよい。二は、滅尽説。死ねば身は滅び、したがって識のよるところはない。身も識も滅びてしまえば誰が一体苦楽を受けよう、故に因果はない。三は、無報説。現実の世を見れば、道徳を修めた人でも貧賤で早死をしてしまう。逆に凶悪の者が富貴で長寿を全うする例も多い。だから因果のないことがわかる。儒教の書にも善惡の報を論じる例は多い。

『冥報記』には古来よりの歴史的伝承を列記しながら、三世因果の有無についての問答が掲載されている。因果応報説を信じる者、信じない者など、さまざまな思想的抵抗のあったことが読み取れるのである。説話の形で具体的に因果応報の事実が存在することを人々に説くいっぽうで、上記に示すように、この世に因果応報などというものは存在せず、それにとらわれることなく人は、人間は己に従って行動すれば良いのである。死ねば身は滅び、物事を見分ける心のはたらきである「識」もなくなる。死ねば身も心も消滅し、そこに因果などは存在しない。それが証拠に、人間社会をみれば道徳を修めた人でも貧賤で早死にする。逆に凶悪な者が富貴で長寿を全うする例も多い。因果というものはないのであると、因果応報説を否定する文章が掲載されているのである。

しかし、景戒はこの『冥報記』に記載されている因果応報、三世因果に対する反論説にはほとんど触れていないのである。『日本霊異記』では、あくまでも、「因果応報の理」を絶対的真理、教えとして位置づけ、徹底して人々に知らしめることに力を注いだのである。

心身に障害のある人を題材にして教えを説くこの因果応報説は後に、わが国の多くの仏教宗派において重要な教説として確立されていくのである。

### [引用・参考文献]

(1) 説話研究会編『冥報記の研究』第一巻、勉誠出版、1999年、4頁。

(2) 入部正純『日本霊異記の思想』法蔵館、1988年、116～117頁。